

戦後思想再考

テーマ： 戦後日本のアカデミック・ディスコースにおける西欧志向という問題

司会・世話人： 中野敏男（東京外国語大学）

報告者： 初見基（日本大学）、川本隆史（東京大学）、三島憲一（東京経済大学）

I. 企画趣旨 ——本セッションは、連続企画の第二弾として、つぎの趣旨に基づいて実施された。

戦後日本のアカデミック・ディスコース、とりわけ社会思想史に関わる領域では、共通の基礎教養としてスミス、ヘーゲル、マルクス、ヴェーバーなどが前提とされて、顕著な西欧志向の傾向がずっと支配してきた。それは、世界戦争に行き着いた西洋近代への評価のためらい、とりわけナチス体験から戦時ドイツとは無縁であると振る舞いたい気分が蔓延した西欧や、それとも対抗しつつ新興ナショナリズムに進んでいたアジア・アフリカの思想状況などと対比すれば、かなり「特異」とも言える事態であった。もちろん、日本の戦時体制という過去への反省が、西欧近代をどこかで理想化した視線を生み出したのも事実であろう。しかし、その西欧志向は、アカデミック・ディスコースを越えて、教育や家庭（西洋音楽）に、またメディアにおける西欧事情の記事や、観光写真や西欧の都市生活への一定のイメージにまで影響を及ぼしていく広い射程をもっていたし、それがまた研究者における西欧への単純な視線にも跳ね返り、さらに西欧以外の世界への視線にまで影響を与えている。またそれは、直対応的な反発も引き起こして、そのちょうど裏返しに「アジア主義」や「大衆志向」を生んだりもしている。そうだとすればこの現象は、単純に「近代主義」とだけ言って切り捨てれば済むわけではなく、もっと多面的な考察を要する思想課題であるに違いない。

そこで本セッションでは、「アンチ資本主義と西欧志向の奇妙な共存」「西欧近代という物言いはなにを意味していたのか」「戦後ヨーロッパが立ち直る前から（ナチスと戦争の直後の）ヨーロッパに定位したのはなぜか」（研究者の無知や未熟のせいばかりではないはず）などという観点を意識しながら、戦後思想を多面的に再検討した。対象は「戦後思想」だが、一昨年のセッションでもそうであったように、それは狭い意味での「日本（人）の戦後思想」ではなく、同時代に論じられたマルクス、ヴェーバー、ハイデガー、サルトルなども含む思想の圏域を全体として捉えるものとした。そのように思想の視野を広げて、この時代の思想の形と意味とを十全に捉え、議論の内容を豊かにしようという考えである。

II. 報告 ——以上の企画趣旨に基づいて、つぎのような四つの報告がなされている。

第一報告 初見 基： 「戦後」という視点について

初見報告では、「戦後思想」あるいは「戦後文学」と言われる際に暗黙のうちに前提されていると思われる心性について、埴谷雄高が1974年に発表した文章（「戦後文学の党派性」及び「戦後文学の党派性、補足」）を手がかりに、2点の指摘がされた。

第1は、《私達は無の廢墟から出発した》という認識を埴谷は披瀝しているが、これは広く日本の戦後文学にとどまらず、ドイツ戦後文学などにおいても《零時点（Stunde Null）》等の合言葉によって

共有されるものだった。このような言い回しは「まったく新たな出発」を表すにしても、実際においては「1945年」ですべてが断続しているわけではなくむしろさまざまな局面に連続性を有している、この事実を隠蔽するものであることは、つとに指摘されている。ことに「アカデミック・ディスコース」に関しては、社会科学分野で一定の論究があるものの、今後のより広範な議論が必要とされる。

埴谷の文章に即して見られる第2は、《戦後出発した私達すべてにとって、まこと、死者こそ物言わぬ現存として私達がのつびきならず直面しなければならぬ最初の生者だったのである》というように、「死者」が措定され、これが自分たちの営みを考えるうえでのいわば規矩とされている点だ。より一般的に言うならば、「戦争の死者を悼む」という心性が、「戦後」意識の大きな部分を占めてきたことはたしかだ。その際に、諸個人の体験のなかで直接係わりのあった知己の死のみが問題となるわけではない。「死者の記憶」とは、いわば想像力による構築物でもあるという側面をもち、「見知らぬ他者」の「記憶」もが考えられる。そして想像力の到達範囲が「国境」に規定されているときそれは「被害」に照準を定めたナショナルスティックな言説にとどまらざるをえないが、1970年代半ば以降、中国大陆、朝鮮半島をはじめとする「戦争の死者」に向けた想像力が広範に共有されるようになった。これは「戦争の死者」への記憶が直接の体験からよりいっそう離れていったこととも結びついているだろう。ともすれば抽象的な議論に流れかねないこうした意識の変化をどのように思想のなかに取り込むのか、これもいまだ「戦後思想」の課題と言えらるだろう。

第二報告 川本隆史：『戦後日本の思想』（1959年）の教訓

川本報告は、『戦後日本の思想』（久野収・鶴見俊輔・藤田省三著、1959年／岩波現代文庫、2010年）の解題エッセイ（『戦後思想の名著50』平凡社、2006年所収）と発題メモを配布するかたちをとった。

「正義」と「ケア」を「社会」という《つながり》の中に位置づけようとする、川本の年来の問題意識は、直接にはジョン・ロールズおよびキャロル・ギリガンとの出会いがもたらしたものだが、その背景には「戦後思想」の読者体験が控えていたことに改めて思いいたった。すなわち、清水幾太郎の『倫理学ノート』（1972年）の挑発を受けてロールズおよび現代正義論へと研究テーマを切り替えたのだし、ケアやフェミニズムへの関心は森崎和江の一連の著作に親しむことによってあらかじめ醸成されていたのであると。

川本の解題によれば、久野らの共著から汲み取るべき教訓は四つある——「まず鶴見からは、思想史における「循環性」（同一テーマの反復）と多元主義（歴史の目標および担い手を一元化しないで、つねに複数の目標と推進主体を想定する方法）。……次に藤田からは、日本の大衆思想における「欲望ナチュラリズム」への内在的批判。久野からは、ヨコの共同にとどまらない「タテの民主戦線」（多様な価値観を有するデモクラットたちの世代を超えた連帯）の構想。」（おわりに）

最後に川本は、「戦後思想における「科学」と「倫理」の切断（および奇妙な使い分け）ということ」を克服したいと補足した。この課題は、鶴見俊輔がつとに指摘していたことがらを受け継いでいる——「今の日本の社会科学は、科学的な思考でうまく行かない時は、ちょっと贋札を出すようにして、道德のカードでつないで行く。……そうじゃなくて道德の中に深く根をおろしながら、科学的な手続きで議論をすすめる学風をつくるのが、これからの問題なんです。」（岩波現代文庫版249～250ページ）

1950年代の末、科学と倫理への問い詰めが鶴見や藤田らによって提起されたにもかかわらず、60年代末の学生反乱、「科学批判の10年」とも総括される70年代、そして福島第一原発事故を経た現在も

なお、両者の切り分けが横行している。その窮状をどう突破すればよいのかと川本は自問した。

第三報告 中野敏男：戦後日本の社会科学とスミス・マルクス・ヴェーバー問題

中野報告では、戦後日本の社会科学を考える基点として、1964年の「マックス・ヴェーバー生誕百年シンポジウム」の議論が参照された。このシンポジウムは、大塚久雄や丸山眞男をはじめとする「戦後日本の社会学者」の中心的な存在が参加して、ヴェーバーに沿いながら戦前から戦後にいたる日本の社会科学の連続が当事者により総括されるものとなったからである。

とりわけ中野が取り上げたのはシンポにおける内田義彦の「日本思想史におけるヴェーバー的問題」という報告で、ここで内田は、1943年に大原社研が出した論集『決戦下の社会科学』における大内兵衛の論を手がかりに、戦中のスミス研究と重商主義研究が戦後のヴェーバーとマルクスに志向する社会科学へと連続している回路を見定めている。大内がそこで強調していたのは、「大東亜戦争」が戦われているその秋に「古典研究の復興」があるという点である。すなわち、ここでスミス研究とは経済と倫理の調和という問題で、それは戦時の国民経済の為に国民的生産力としての経済倫理を発動しようという議論であり、またそこで重商主義研究とは、「旧来の生産方法を近代的なそれへ過渡することを強行的に短縮する人為的手段」としての重商主義を植民地帝国の戦争目的にかなう経済建設のために顧みようという議論だった。戦後のスミス研究をリードした当の内田が言うように、このような戦時の古典研究が戦後日本の社会科学につながっているというのなら、そこにある西欧志向とは、決戦下にある植民地帝国＝日本の国民経済建設への関心が、「みじんのゆるぎもなく」戦後日本においても社会科学の出発点になったことの証左となる。中野報告はこの戦中・戦後の連続について問題提起するものとなった。

第四報告 三島憲一：目標としての「近代主義」と批判としての近代主義について

三島報告には、二つの目的があった。ひとつは、現代思想や現代社会を、東と西、日本と西欧（最近では日本とアメリカ）などという図式で捉えないで、同じ近代の種々の現れと見ることである。

第二の目的は50年代、60年代のいわゆる「近代主義」について考えることである。結論的には戦後思想を手がかりに、反抗の理論としての多系的近代化を志向することである。

「近代主義」は、近代主義者たちがそう称したのではなく、彼らにつけられたレッテルであり、多少の距離を持った、そして揶揄のこもった表現である。距離や揶揄の第一は、マルクシズム正統派の側からのそれである。第二は、西欧の特定の国を模範にして、その国の近代化に成功した要素が日本にないことを慨嘆する、日本の知識人に多いいわゆる「欠如理論」への違和感である。エリート主義的なこうした議論への批判を唱えたのが竹内好である。距離や揶揄の第三は、近代主義者のうちに「隠れたカリキュラム」としての偽りのナショナリズムを発見した者たちの違和感である。だが、特に90年代以降盛んになったこのナショナリズム批判は、あまりに大風呂敷で、ネーションと言えばすべてマイナスの符号をつけるだけで、血縁共同体的に理解されたネーションと、政治的共同体（politisches Gemeinwesen）の担い手として規範的に理解された民主主義のconstituencyとしてのネーションという、批判者がみずから要求しているはずの区別を守っていない。距離や揶揄の第四は、「近代主義」とアメリカとの癒着に関してである。1960年の日米箱根会議のキャッチフレーズが「近代化」だった。井上清などがこの批判の代表である。

だがどの批判も、例えば家族の秩序などに関しては、日常道徳的に共通の次元があった。

こうした議論を振り返ると、必要なのは、近代理解の複雑化であり、深化であることがわかる。それは同時に近代のさまざまな規範が、実際に根を下ろす時の多様性の構造を重視することでもある。根をおろすにあたっては個々の特殊な経験は反抗と批判の資源になり得るという主張がなされた。

Ⅲ. 討 論 —— 報告から出発してなされた質疑と討論はつぎの通りである。

今回のセッションは、40名ほどの参加者を得て行われた。初見報告に対しては、太田仁樹会員より、死者を悼む「追想する共同体」がナショナリズム的な範囲にとどまり、「見知らぬ他者との連帯」は結局狭隘になってしまうのではないかと、という危惧が表明され、それに対しては、「見知らぬ他者」の範囲をどのように開いてゆきうるか、理論的により詰めてゆく必要がある、との返答がなされた。中野報告については、同じく太田会員より、内田義彦が戦中と戦後をつなぐ「市民社会青年型」アカデミズムと見る対象は講座派の影響を受けた青年層とされており、大内兵衛などをそれとするのは無理ではないかとの批判があり、それに対しては、大内論文が当時の学界展望になっている点が指摘され、その中に登場する研究者たちがその青年層に該当すると考える旨の返答があった。三島報告に関しては、竹内と大塚の『思想』の座談会をめぐって、質問者と多少のやりとりがあったが、現在から見ると、とてもついでいけない発言が、例えば「根拠地」をめぐって近代主義者の大塚にも近代主義者批判の竹内にもあったことが、三島によって今一度説明された。また川本は藤野寛会員の指摘を踏まえて、三島が強調する「近代理解の複雑化」の中身（複線化・複数化の理路）をさらに詰める必要があろうと論じた。

「戦後思想再考」を基本目的とする連続企画である本セッションも、今回で二回目となって、問題はいよいよ各論に具体化しかつ深化してきたが、それだけに全体として議論の軸が多分化してきたことは否めない。次回は、現れてきた論点の数々をあらためて重ね合わせながら、そこに貫かれる基調を浮かび上がらせていくこともひとつの課題となるだろう。

以 上